

# 顕在的・潜在的シャイネスが自己紹介場面における対人印象に与える影響

澤海 崇文<sup>1,2</sup> 稲垣 勉<sup>1,3</sup> 澄川 采加<sup>1,4</sup>

<sup>1</sup> 教育テスト研究センター <sup>2</sup> 流通経済大学 <sup>3</sup> 京都外国語大学 <sup>4</sup> 泉台小学校

シャイネスが対人印象に与える影響に関してこれまで検討されてきたのは、自己報告法によって測定された顕在的シャイネスの影響であるが、本人では意識できない潜在的シャイネスの影響も無視できないであろう。本研究では、これら二種のシャイネスが対人印象に与える影響を検討した。40名の研究参加者を対象に、二種のシャイネスを測定し、さらに架空場面での自己紹介を文字ベースで行ってもらった。その記述内容を元に第三者が対人印象を評定したところ、対人的望ましさや積極性といった特性に対しては顕在的シャイネスが影響していること、さらに積極性に対しては二種のシャイネスの交互作用効果の傾向が見られることが示された。

**キーワード：**シャイネス、自己報告法、潜在連合テスト、対人印象、他者評定

## 1. はじめに

シャイな人は対人場面において抑制された気分を感じやすいとされ (Leary, 1986)、そのような人は対人場面では上手に振る舞うことができず、他者からの印象は悪くなってしまうものと思われる。シャイネスが対人印象に与える影響を見た研究として、本邦では栗林・相川 (1995) が挙げられる。この研究では、実験参加者の対人印象が対人相互作用の相手や第三者により評定された。その結果、シャイネスが高い人は低い人に比べ、個人的親しみやすさや力本性といった次元において評価が低かった。

栗林・相川 (1995) は、自己報告法で測定された顕在的シャイネスが対人印象に与える影響の研究といえる。近年、自己が意識できないレベルでの潜在的な態度や自己概念を測定する手法が開発されており、その一つに潜在連合テスト (Implicit Association Test, 以下 IAT; Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998) が挙げられる。相川・藤井 (2011) は尺度および IAT を使用し、これら二種のシャイネスおよび関連する行動傾向を測定した。分析の結果、顕在的シャイネスは賞賛獲得行動といった意識下の行動を予測するのに対し、潜在的シャイネスは対人緊張といった無意識的に生じる行動を予測することを示した。これら二種のシャイネスがそれぞれ別個の行動に結び付くことを考えると、各シャイネスは対人場面で与える印象に対しても異なる影響を及ぼすであろう。本研究では、顕在的および潜在的シャイネスが対人場面で与える対人印象にどのような影響を及ぼすのかを検討する。対人場面として、緊張が高まりやすく、シャイネスの影響が特に観察されやすい自己紹介場面を取り上げる。

## 2. 方法

**2.1 参加者** 40名の大学生または社会人 (男性 15名, 女性 25名, 年齢  $M = 24.10$  歳, 年齢  $SD = 3.58$  歳) が本研究に参加した。

**2.2 測定項目** 潜在的シャイネスの測定のため、相川・藤井 (2011) のシャイネス IAT を使用した (詳細は相川・藤井を参照されたい)。顕在的シャイネスの測定のため、相川 (1991) の特性シャイネス尺度を使用し、5件法で回答を求めた。参加者に自己紹介の場面

を想像してもらうため、見知らぬ人が100人程いる前で1分間の自己紹介をする際に話す内容を記述してもらった。なお、本論文では報告しない尺度も含まれていた。

**2.3 手続き** Inquisit Web License を用いて、上述の研究材料が一つのプログラムにまとめられ、参加者は都合の良い時に各自のPCを用いてオンラインで研究に参加した。その後、本研究の目的を知らない2名の大学院生が沼崎・工藤(2003)の印象評定形容詞対のうち23対を用いて、各参加者の自己紹介文をもとに対人印象を5件法で個別に評定した。

### 3. 結果および考察

**3.1 信頼性分析および得点化** 特性シャイネス尺度は十分に高い内的一貫性 ( $\alpha = .92$ ) が確認されたため、相加平均を求め顕在的シャイネスの得点とした。シャイネス IAT については *D* 得点 (Greenwald, Nosek, & Banaji, 2003) を算出して潜在的シャイネスの得点とした。対人印象の評定値が2名間で類似しているかどうかを見るため、形容詞対ごとに相関係数を確認したところ、1対(気長な - 気短な)のみ負の相関が得られ、残りの22対は正の相関が得られたため、以降の分析ではこの22対で2名の評定値を平均して使用した。

**3.2 因子分析** 形容詞22対に因子分析(最尤法, 固有値1基準, 因子負荷.35基準, プロマックス回転)を行い、表1のように3因子が抽出された。複数因子に.35以上の負荷を示した項目は続く分析に使用しなかった。7項目から成る第1因子を対人的望ましさ、3項目から成る第2因子を積極性、3項目から成る第3因子を軽薄さと命名し、各因子名が示す概念を表すよう反転処理を施し、相加平均得点を算出した ( $\alpha$  係数は順に.91, .91, .74)。

表1 印象評定形容詞対に対する因子分析結果

	因子1	因子2	因子3
生意気でない - 生意気な	<b>0.89</b>	0.28	0.17
親しみやすい - 親しみにくい	<b>0.75</b>	-0.27	-0.10
心の広い - 心の狭い	<b>0.63</b>	-0.06	0.19
にくらしい - かわいらしい	<b>-0.60</b>	-0.01	0.02
意地悪な - 親切な	<b>-0.63</b>	0.29	-0.17
感じの悪い - 感じのよい	<b>-0.71</b>	0.23	-0.10
人の悪い - 人のよい	<b>-0.83</b>	-0.04	0.10
自信のない - 自信のある	0.17	<b>1.04</b>	-0.22
積極的な - 消極的な	0.34	<b>-0.73</b>	0.00
堂々とした - 貧素な	0.04	<b>-0.83</b>	0.01
知的な - 愚かな	-0.12	-0.03	<b>0.80</b>
重々しい - 軽い	-0.16	0.20	<b>0.78</b>
粘り強い - 諦めやすい	0.32	-0.30	<b>0.66</b>
謙虚な - 図々しい	<b>0.77</b>	<b>0.87</b>	0.17
外向的な - 内向的な	<b>0.52</b>	<b>-0.53</b>	-0.28
誠実な - 不誠実な	<b>0.50</b>	-0.10	<b>0.55</b>
人付き合いのよい - 人付き合いの悪い	<b>0.50</b>	<b>-0.49</b>	-0.16
責任感の強い - 無責任な	0.26	<b>-0.39</b>	<b>0.66</b>
落ち着きのない - 落ち着いた	-0.13	<b>-0.43</b>	<b>-0.56</b>
非社交的な - 社交的な	<b>-0.41</b>	<b>0.70</b>	0.05
不活発な - 活発な	<b>-0.58</b>	<b>0.51</b>	0.15
暗い - 明るい	<b>-0.69</b>	<b>0.41</b>	0.17

**3.3 シャイネスが対人印象に与える影響** 印象評定形容詞対の各下位尺度得点を従属変数、顕在的・潜在的シャイネスの高低（各シャイネスの中央値で分割）を要因とする分散分析を行った。対人的望ましさでは顕在的シャイネスの主効果のみが有意であり ( $F(1, 36) = 4.82, p < .05$ ), シャイネス低群は高群よりも対人的望ましさが高かった（順に  $M = 3.93, 3.59$ ）。積極性では顕在的シャイネスの主効果が有意であり、交互作用効果が有意傾向であった ( $F(1, 36) = 8.84, p < .01; F(1, 36) = 3.25, p = .08$ )。図1より、顕在的シャイネス低群では、潜在的シャイネス低群は高群よりも積極性が高い傾向が見られ ( $M = 4.11, 3.58$ ), 顕在的シャイネス高群では、潜在的シャイネス低群は高群よりも積極性が低い傾向が見られた ( $M = 3.00, 3.30$ )。よって、二種のシャイネスの高低が一致しているほうがそうでないよりも、積極性が高い傾向が見られた。軽薄さについてはどの効果も有意ではなかった。

以上をまとめると、対人印象の形成においては顕在的シャイネスが大きな役割を果たしているが、二種のシャイネス高低が一致しているかどうか追加の影響を与えている可能性が示された。ただし、対人印象というのは本来、言語的情報だけでなく、しぐさや表情といった非言語的情報も影響をもたらすと思われるため、今後は非言語的情報も併せた検討が必要であろう。

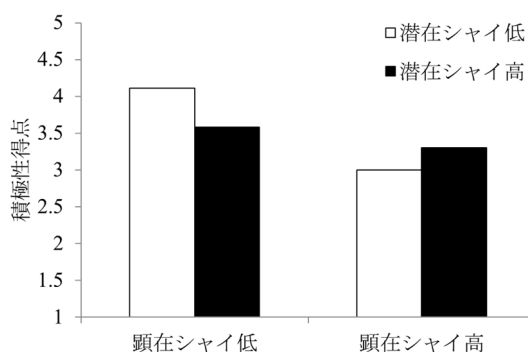


図1 二種のシャイネス高低で群分けした積極性得点

#### 4. 参考文献

- 相川 充 (1991) 特性シャイネス尺度の作成および信頼性と妥当性の検討に関する研究, 心理学研究, 62:149-155
- 相川 充・藤井 勉 (2011) 潜在連合テスト (IAT) を用いた潜在的シャイネス測定の試み, 心理学研究, 82:41-48
- Greenwald, A.G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998) Measuring individual differences in implicit cognition: the Implicit Association Test, *Journal of Personality and Social Psychology*, 74:1464-1480
- Greenwald, A. G., Nosek, B. A., & Banaji, M. R. (2003) Understanding and using the Implicit Association Test: I. An improved scoring algorithm, *Journal of Personality and Social Psychology*, 85:197-216
- 栗林克匡・相川 充 (1995) シャイネスが対人認知に及ぼす効果, 実験社会心理学研究, 35:49-56
- Leary, M. R. (1986) Affective and behavioral components of shyness: Implications for theory, measurement, and research. In W. H. Jones, J. M. Cheek, & S. R. Briggs (Eds.), *Shyness: Perspectives on research and treatment* (pp. 27-38). New York, NY: Plenum Press
- 沼崎 誠・工藤恵理子 (2003) 自己高揚的呈示と自己卑下的呈示が呈示者の能力の推定に及ぼす効果—実験室実験とシナリオ実験との相違—, 実験社会心理学研究, 43:36-51
- 5. 謝辞** 本研究は元筑波大学教授の相川充氏の指導を受けた。ここに記して御礼申し上げる。

